

青空白雲

表紙イラスト／なえなえ



おにいちゃん  
大好き!

ふたごいもうとの誘惑合戦

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された  
『おにいちゃん大好き！ ふたごいもうとの誘惑合戦 前編』  
『おにいちゃん大好き！ ふたごいもうとの誘惑合戦 後編』  
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



おにいちゃん  
大好き!

ふたごいもうとの誘惑合戦

青空白雲

表紙イラスト／なえなえ

二次元ぷち文庫

## 登場人物紹介

### Characters

---

こいけ ゆ き

#### 小池有希

再婚によって洋太の義理の妹になった双子の妹。小動物チックな外見のメガネっ娘で、本を読むのが好きである。

こいけ ま な

#### 小池真奈

有希の双子の姉。ギャルっぽい外見の女の子で、今まで付き合った男とは違って真面目な洋太のことが気になっている。

こいけ よ う た

#### 小池洋太

星を見ることが好きな男子学生。母を早くに亡くして父と二人暮らしだったが、父の再婚によってふたりの義理の妹と暮らすことになる。

六月のことだった。

小池洋太は汗を拭きながら、家路を急いでいた。

（今日も土星が観察できるかな？ 楽しみだ）

高校入学祝いに、父から買ってもらった望遠鏡で宇宙を見るのが、少年の楽しみだった。高校三年生、十八歳である。

（早く帰って、夕飯を作らないとな）

幼い頃に母を亡くし、兄妹もいなかった少年は、料理も上手になっていた。

「あれ？ 今日父さんがいるのか」

自宅に着いて、首をかしげた。父愛用のシルバーの自動車が止まっていたからだ。

「ただいま。父さん、どうしたの？」

と、リビングに入り、目を見開いた。そこには、見ず知らずの女性三人がいたからだ。その美しさに、驚いてしまう。

ひとりには、三十代半ばだろうか。栗色のウェーブヘアを優雅に細い肩に流している。顔は瓜実顔。細く弧を描く眉の下には、穏やかなアーモンド形の目がふたつ。鼻筋は細く通

り、高い鼻の頭を作っている。唇にはローズ色のルーージュが引かれ、実に悩ましい。

ふたり目は、高校生だろう。黒髪を背中に流した、めがねをかけた女の子。顔は小さな卵形で、黒目がちな瞳は小動物を思わせる。小柄なこともあり、守ってあげたい！と思わせる可憐さを持つている。シフォンブラウスが実に似合っている。

そして、三人目。こちらも高校生。洋太は「ああ……」と声を漏らした。苦手なタイプだったからだ。

ハニーベージュ系の明るい髪は、日の光で、黄金にも、赤みがかつても見える。カールをかけ、毛先をくるくるさせて、肩と背中に流している。顔は白いが、見た目は勝気で生意気そうなギャルタイプ。目はアーモンド形で、母親に似ているかもしれない。瞳は明るい色で、カラーコンタクトでも入れているのかもしれない。目も鼻も品よく整って、美少女であることは間違いない。

「洋太、来たか。紹介しよう。ながしまゆりこ長島百合子さんと、娘さんの有希さん、真奈さんだ」

頭を下げて、お辞儀をし、父の隣に腰を下ろした。

「ふふ。初めまして。お父さんからお話しは聴いています。とても勉強ができるんですけどね？」

「いえ、そんなことはありません」

「お父さんが天文台に勤めているから、星が好きなんでしょう？」

「はい。毎晩望遠鏡で星を見るのが好きです」

と、答えると、百合子の横にいた、派手に髪を染めた少女——真奈が鼻を鳴らした。

「男のくせに、星が好きだなんて、気持ち悪い」

「真奈。そういうことを言うんじゃないやありません」

母親が眉を吊りあげた。

「男だったら、外でサツカーでもしなさいよ。そちのほうはずっと健康的でしょ」

コーヒーを啜り、冷たい視線を投げてくる。脚を組み替えた。一瞬、ドキッとした。むちむちした白い太腿がちらつと見えたから。パンティまで見えたかもしれない。頬が火照った。

（やっぱり、この子はこういう子だったのか。僕を馬鹿にしているな。——って、このひとたちは一体？）

疑問の目を向けてきた息子に、父親が笑う。

「実はな、父さんは百合子さんと結婚することになった」

「ええ？ そんなっ。結婚？」

あまりに突然の話ではないか。息子になんの相談もなしに、いきなり結婚とは……。この綺麗で気品溢れる女性が、新しい母親になるというのか。洋太も十八歳、幼い頃に亡くなった母だけが母だとこだわるわけでもないが、事前にひと言くらい、相談があつても

いいではないか。

「銀行のひとに紹介されてな。付き合っていたんだ。百合子さんも、以前に旦那さんを亡くされていてな。まあ、詳しい話しはおいおいしよう」

うなずき、改めて、新しい母となる女性を見る。きつと、料理も上手なのだろう。学校への弁当も作ってくれるかもしれない。

すると、真奈がその夢見心地を打ちやぶった。

「ふん。こんなひとが兄になるなんて、わたしはいやだなあ。全然ぱつとしないじゃない」  
洋太ははつとした。この苦手なタイプの少女が妹になるのだ。

「お姉ちゃん、失礼なこと、言っちゃだめ。素敵なお義兄さんじゃない」  
初めて、黒髪の清楚な少女が口を開いた。有希とは気が合いそうだ。

「詳しく話しておかかったわね。洋太さん、真奈と有希は双子なの」  
義母となる女性が目を細め、優しく説明した。

「双子……ですか」

「何、その意外そうな顔」

真奈が挑戦的な目で見てくる。慌てて、洋太は視線を反らしてしまう。

「正確に言えば、真奈が先に生まれたんだけどね。十六歳で、高校に入ったばかりで、転校になるから、ふたりには申し訳ないと思っているの。ふたりとも、こちらにある高校に



通います」

「同じ高校ですか？」

「真奈は洋太さんと同じ公立のJ高校に行くの。有希は転入試験に合格したから、私立のK女子高校に入ります」

私立K女子高校といえば、かなりの名門校である。お嬢様ばかりが通う高校で、偏差値も高い。さすがは有希だと、感心してしまう。

「で……。いつ結婚するの？」

父のほうを向いた。

「もうすぐだ。来月には式を挙げる。そのあと、そのまま新婚旅行に行くからな。洋太、ふたりとしばらく三人になるが、仲良くするんだぞ？」

目が点になった。あまりに急な展開だ。

「よろしくお願います、お義兄さん」

有希がめがねの奥の円らかな瞳を輝かせ、丁寧な頭を下げた。黒い髪がさらさらと、肩から腕に流れていく。天井の白い照明で、髪に光が走る。

「よろしくお願いますっ」

と、義兄となる少年は顔を輝かせた。今までの十八年間、全く女っ気もなく過ごしてきた。よくマンガに出て来るかわいい幼なじみなどいらず、女の子の友達もできたことがな

い。女性の前に立つと、緊張で心臓が破裂しそうになるのだ。今だって、いきなり三人の綺麗な女性と出会い、家族になると聴いて、頬が真っ赤になっているのが分かるほどだ。

(こんなにかわいい、おしとやかな子が僕の義妹に……。まるで、夢みたいだ)

今までの苦勞が報われたと、目がしらが熱くなる思い。学校でもぱつとせず、活発な男子にからかわれ、女子にも小馬鹿にされる日々を送ってきたのだ。

だが、その至福の思いも、真奈を見て、クールダウンしてしまう。

「あーあ。こんなひとと一緒に暮らすなんてね。ついてない」

腕を組み、大げさにため息をつき、義兄を睨む。思わず、すいません、と謝ってしまいうるようになった。

波乱に満ちた新生活になりそうで、早くも動悸を覚える草食系少年だった。

## 2

七月になった。

「はーあ。いやになっちゃうなあ」

洋太は望遠鏡のファインダーを覗きながら、呟く。今日は晴れていたから、よく星が見えるはずだ。洋太は部屋の横にあるベランダにいた。

今日、新しい家族になる義母・義妹たちが引越してきた。今まで父親とふたり暮らしをしてきて、男臭かったのが、いきなり女性たちのかぐわしい香りが広がって、洋太はドキドキしてしまった。

ちゃんとうまくやっていけるか、不安だ。義母や有希は優しくいいが、問題なのは、あの生意気な義妹・真奈だ。完全に義兄である自分を馬鹿にしている。強く注意したほうがいいのだろうか、そう思ったりもするが、所詮、気弱な自分のこと、できるはずもない。「くそ。あの真奈って奴、相応いやな奴だな。あまり関わりたくないな」などと呟きながら、倍率を調節する。

そのときだった。

「ひとりでひとの悪口なんて、根性が曲がっているわね」

びくっとした。後ろを振り返ると、洋太の部屋に真奈があがりこんでいた。ベージュのノーズリーブブラウスに、紺色のミニフレアスカートという格好だった。

「いきなり、ひとの部屋に入ってくるなよ」

ぽそつと呟くと、真奈が耳に手を当てる。

「何？ 聴こえないんだけど。もう少し、大きな声で話してくれない？」

「だから、ひとの部屋に——」

「ふん。星なんか眺めて喜んでるんじゃないわよ。あたし、暗い男って大嫌い！」

眉を吊りあげ、鼻筋脇に薄い皺を寄せて、唇を尖らせる。そんな顔もかわいいと思ってしまう。思ってから、我に返る。

(こんな性悪の女に見惚れているんじゃない！　しつかりするんだ)

ベランダから部屋に戻り、義妹と向きあう。

「なんの用？　忙しいんだけど」

声が震えていた。同じ年頃の異性との会話に慣れていないのだから、しょうがない。

「暇だから来ただけ。ねえ、何かマンガとかないの？」

真奈が部屋の中をきよろきよろする。いきなり部屋に入ってきて、なんと失礼な子だろう。洋太は腹が立ってきた。はつきりと文句も言えないところが悲しいが……。

ふたつ年下の義妹は、本棚に向かった。そこには、天文図鑑や、望遠鏡に関する本、生物の進化に関する本などが何十冊も収まっていた。あとは、英和辞典、国語辞典などの辞典、夏目漱石などの小説が置かれてあり、コミックはほんの三冊のみだった。真奈が気に入りそうなものはないだろう。

しかし、それよりも、洋太は真奈のミニスカートから伸びるむちむちした太腿と、ふくらはぎの優しいカーブラインに目を奪われていた。つん、と後ろにお尻が突きだされた格好になっているのもすごい。斜めだが、こちらにお尻を向けているアングルである。少年は、頬を火照らせて、少女のお尻を眺めた。フレアなので、お尻のラインははつきりとは

浮き上がらないが、それでも、その丸みは分かる。

（女の子って、どうしてこうもみんな、柔らかそうなのかな？ 男とまるで違うな）

腰のくびれから豊かにお尻へと膨らんでいく弧線が悩ましい。曲げた膝に手をつき、こちらにお尻を向けているものだから、なおさら迫力がある。太腿も実に柔らかそうだ。そして、ふんわりと漂うフローラルの微香……。

（女の子はいい匂いがあるなあ。香水かな？ シャンプー？）

ずっと嗅いでいたい心地いい香りだ。父とのふたり暮らしでは決して嗅ぐことがなかった魅惑のフレグランス。

すると、突然、義妹が振り返った。

「全然面白そうなもの、ないじゃない。——何見ているの？」

「あ、いや、その……。何も見ていないよ」

慌てて後ろの飛びさった。気がつかないうちに、随分近づいてしまったらしい。

「気持ち悪い……。あんた、あたしのこと、変な目で見ていないでしょうね？」

「見ていないよ！ 家族じゃないか」

緊張でかすれる声で言う。

「ふん。どうだか。あんたくらいの年の男はエロいことしか頭にないからね。前の学校でも、馬鹿な男子が週刊誌を持ちこんで、アイドルのグラビアを眺めて騒いでいたけど。あ

「んたも、エロ本を隠しているんじゃないの？」

「馬鹿なこと、言わないでよ」

腕を組み、睨んでくる義妹。その腕のせいで、胸の膨らみがせりだして、その豊かさとも丸みを強調する結果になる。

「ちよつと見せてみなさいよ」

机に行き、引き出しを開ける。

「プライバシー侵害だよつ。やめてよ！」

「うるさいつ。あんたなんかにはプライバシーなんか無いの。——ん？ 何、これ？」

みつつある引き出しの一番下を開け、漁っていた義妹が何かを見つける。心臓が跳びはねた。小さな手が掴んだのは、エッチな雑誌、密かに夜中に家を出て、コンビニに向かい、店員やたまに入って来る客を気にして、二時間かけ、ようやく手に入れたものだった。

本当は、パソコンなどでアダルトな動画サイトでも見られればいいのだが、不当請求のニュースなどで怖気づいてしまい、ネットのその手のサイトには一切アクセスしないようにしている。

「ふーん。『エッチなお姉さまが教えてあげる』。DVD付きか。こういうの、好きなの？」  
ジロツと睨まれ、肩を縮めた。

「ふふん。年下には興味がないみたいね？」

「う……。そういうことを訊かれても……」

店員が商品棚に隠れて見えなくなった隙を狙って、適当に手を伸ばして買ったものだから、特にお姉さま趣味があるというわけではない。もちろん、その夜は明け方までオナニーに励んでしまったのだが……。付属のDVDも観賞した。お姉さんが年下の少年を誘惑する、という内容のAVばかりをクライマックスシーンだけ集めたものだった。グラビアを見て、二回、DVDに至っては三回、その晩だけでヌイタ。

「どうなの？ はつきりしなさいよつ。あんた、年上がいいの？ 女子大生とか、OLが好きなの？」

「うう、そういうわけじゃないけど……」

「優柔不断な男ね。イライラする」

エロ本のページをめくって、中を見ながら、唇の端を吊りあげる。眉間に皺が刻まれ、不道徳な雑誌を持つ指がふるふる震えてくる。

（ああ！ ぶたれる！ 絶対にぶたれるよつ。なんて不運なんだ……）

歯をカチカチいわせて、来るべきパンチに身構えていると――。

「じゃあ、あんた、コレで何回ヌイたの？」

「ヌイ……。そんなこと、どうして――」

「答えなさいよ。一回だけってことはもちろんないわよね？」

切れ長の目をこちらに向けてくる。怒った顔もかわいい。

「うう……。十回……。いや、二十回……。五十回くらいです！」

こちらに迫られて、つい、本当のことを話してしまった。このエロ雑誌を買ったのは、つい先週である。綺麗な女性陣と一緒に暮らす、そのことへの期待やときめきもあったのだろう。生まれて初めて、アダルト雑誌を買ってしまったのだ。

「へえ。大したものだわ。星ばかりに興味があつて、全然女つ気がないから、異常かとも思つたけど、一応、少しは正常みたいね？　じゃあ、命令。オナニーしてみて」

「は？　オナ……。つて、まさか！」

「早くしなさいよ！　あたしの言うことが聴けないわけ？」

腰に手を当て、迫ってくる。慌てて首を横に振る。

「聴けます！」

「じゃあ、早く脱ぎなさいよ。汚いおちん○ん見せなさい」

当然のことだが、女の子にペニスを見せたことなど、今までに一度もない。こんなに明るいとこで、真奈にペニスを見せるどころか、自慰まで披露しなければならぬのか。羞恥心に頬が火照つた。震える指でズボンを脱ぐ。

（どうしてこんなことに……。くそつ、なんて性格が悪い子なんだ。本当に、あの優しいお義母さんの娘なのか？　有希ちゃんと双子というのも、信じられない）



ズボンを脱ぐ。ちらつと少女の様子を窺う。

「ちんたらしてんじやないわよ。のろま」

「すいません……」

真奈の声に肩を縮めて、トランクスを一気に下ろした。

「へえ。なかなか立派じゃないの」

（ああ、見られている……。恥ずかしくてたまらないよ！）

頬を真っ赤にさせ、うつむいて、手で隠そうとすると、叱られる。

「こらっ。隠さない。手をどけて」

再び真奈の視線にさらす。なんで勃起しているのかと、情けなくなってくる。包皮は剥けて、亀頭は露出している。肉幹はしっかりと硬くなり、芯を通らせて、斜め上八十度を向いていた。亀頭は綺麗な桃色。幹肌も濃肌色である。

（今、女の子におちん○んを見られているのか……。こんなことが起こるなんて）

目の前の義妹はぽうつと義兄の牡莖を眺めている。切れ長の目が開かれ、鳶色の瞳が輝いている。小さな形のいい鼻翼が膨らみ、唇も小さく開いて、はあ……と息を漏らしている。優しいラインを描く頬に薄桜色が萌した。細い手で、ハニーベージュの髪をかきあげる。シャンプーの残り香が散って、少年は胸を熱くさせた。悩ましいフルーティフローラルの香り。ペニスがびくん！ と引きつった。

「さあ、早くしなさいよ。いつもどんなふうにおナニーしているの？」

少年はベッドに腰掛け、右手で優しく幹を擦りはじめた。くすぐったさを覚えた。

「そんなんじや、ないでしょう？　しつかりやりなさいよ。もつと手をシコシコ動かすんでしょ？」

目の前に立ち、怖い顔で見下ろして、少女が怒る。

「分かったよ。やるから、静かにしてよ。有希ちゃんが気づいたらまずいから」

「ふん。あの子は読書をしているわよ。本を読んでいると、全然物音に気づかないから大丈夫。郵便屋さんにも気がつかないくらいなもの」

仕方なく、五本指の動きを加速させた。そして、目の前には、真奈の健康的な太腿が……。普段、学校でも女子は制服のスカートはミニ丈で、生脚を拝見するのだが、こんなにじっくりと女の子の剥きだしの太腿を見たことはない。生白いというか、淡い肌色というか、薄い色で、むち、つと脂肪が充実し、太いわけではないが、ポリウムがある。ぽうつと見惚れてしまう。できれば、触ってみたいくらいだ。

そして、あのスカートの中は……。まだ見ぬ女性の花園を想像する。勇気を出して買ったエロ雑誌のグラビアも、付属のAVも、もちろん、モザイクがかかっていた部分。一体、どうなっているのか、よく分からない。きつとエッチなのだろうと、そんなことを思えば、どんどん淫らな気持ちになつていく。

「先っぽから何か出てきたじゃない」

「う、うん、そうだよ」

「我慢汁ってやつね。これの中にも精子があるんだよね？」

「え？ そうなの？ 知らなかった」

真奈は呆れたように鼻を鳴らす。

「星ばかり眺めていたら、しょうがないかもねえ。この露があたしのなかに入っても、赤ちゃんができるかもしれないのよ？」

あまりに卑猥なせりふに、呆然となってしまう。

（そ、そ、それって、セックス……？）

脳裏に真奈の裸身が浮かび上がる。腕の中で快感に顔を歪める真奈。少年の息が乱れてくる。

「赤ちゃん……」

「変な想像しない！ 早くしごく！」

「はいっ」

慌てて、手コキのスピードを速める。

我慢汁の透明な雫がいくつも生まれてきた。ひとつは、つー、と亀頭丸みを伝いおち、竿に滴る。指がカリ首にまでずりあがり、我慢汁の玉が指に絡み、音を立てはじめ。

じゆく、ちゆく、ちゆく、じゆちゆん……。

鼻先に烏賊っぽい臭気が漂う。だんだん気持ちよくなってきた。若幹全体が熱をこもらせ、尿道にくすぐったいような、熱いような性感がこみあげてくる。

「じれったいわね。まだなの？ まだ臭い精液出さないの？」

「まだだよ。無茶を言わないでよ」

異性にじろじろ見られているのだ。緊張で、射精までに時間がかかってしまっている。

「じゃあ、これなら、どう？」

いきなり、真奈がスカートをめくりあげた。「ああっ」と、洋太は声をあげた。純粹無垢な童貞少年に顔を見せたのは、赤いパンティ。

（赤……。なんていやらしいんだ！）

頭がくらくらする。鼻の奥がツン、と痛くなった。

パンティには、フロントに蝶形の飾りがつけられ、帯のように花柄の刺繍が施されていた。あの向こうに、まだ見ぬ神秘の花びらが隠れている。少年の興奮は一気に高まった。白さが際立つ内股も、魅惑的である。自然に、手コキがピッチをあげた。

「すごい。どんどんいやらしいおつゆが溢れてきている」

真奈が瞳を輝かせた。頬に散った桜色は濃さを増す。こくん、と白いのどが上下する。ふつくらとした果肉のような唇がふるふる震えた。速くなってきた呼吸に、胸の膨らみが

上下する。胸を見れば、おっぱいを想像し、少年の欲情はマックスを迎える。

「あう、出るっ」

どくん！ どびゆ、どびゆびゆ、びゆるるるるっ。じゅくん……。

尿道口から白い噴火が起こった。勢いは止まらず、白い精玉は龟头全体を白く濡らし、ぼた、ぼた、と糸を引いて床に垂れていった。栗の花の臭いが広がる。

## 3

（全く、なんて奴だ……。最悪な義妹だ）

お風呂に浸かって手足を伸ばしながら、洋太は頬を膨らませた。

この世界のどこに、義兄のエロ雑誌を探し、自慰を強要する義妹がいるだろうか。今まで真面目に生きてきた少年には考えられないことだった。

だが、同時に、甘美な自慰の場面が思い出される。自分ひとりで行う自慰とは段違いの快感だった。なにしろ、義妹とはいえ、かなりの美少女が目の前に立ち、ペニスを擦る様を見つめていたのだから。こんな経験は今までなかった。

（ああ、僕は何を考えているんだっ。あんな義妹は義妹じゃないっ。完全に義兄を馬鹿にしているっ。ちゃんと対策を立てないと）

今度、またからかってきたら、きちんと叱るべきだ。それが本人のためなのだ。あんなにデリカシーがないのでは、社会に出たら苦勞するだろう。しつけは大事だ。

密かに決意し、ひとりうなずいていると、浴室の戸が開いた。

振り返って、洋太の目が点になった。スクール水着姿の有希が入ってきたのだから。長い黒髪をアップにまとめ、愛らしいラインを描く頬を真っ赤にさせて……。

これは夢だろうか？ 真奈にエッチにからかわれたから、気分が高揚して、幻覚でも見ているのだろうか？ 思わず、頬をつねる洋太。

戸を閉め、有希はもじもじと立つ。両手の指を前で絡ませて。

(めがねを外すとこんな顔になるんだ。かわいすぎる！)

双子の姉よりも穏やかな目で、目じりが下がっている。瞳は円ら。どこか、リスを思わせる。そして、恥ずかしそうに、唇を噛んでいる。両手の指を前で絡ませて……。

だんだん暑くなってきたが、有希は肌が露出する格好は控えている。身体の線が浮き出る服も着ないのだ。だから、水着姿を見て、柔らかい曲線に恵まれているのに気がついて、胸が熱くなってしまった。当たり前だが、有希も十六歳、高校一年生で、大人の女性になりつつあるのだ。

(しかも……、おっぱいが大きいな。まさか、有希ちゃんがこんなにすごい胸をしていたなんて)

水着を押し上げる胸房は、ちよつとしたスイカサイズである。実に優美な丸みを帯びて、ふたつ、実っている。文学が好きで、おとなしい義妹の立派なおっぱいに、洋太は股間を熱くさせてしまった。

「あの……。お背中、流します」

「え？ あ、いいよ、そんなことつ。自分でできるから」

「でも……。わたし、お義兄さんと仲良くなりたいたいから……」

円らな黒い瞳をうるうるさせ、ふつくらした果肉のような唇を震わせ、指を唇に添えて、頬にさあつと淡薔薇色を広げていく。きゅ、と唇を噛みしめ、うつむく。

（か、かわいい！ 真奈なんかとは大違いだ。こんな子が僕の義妹だなんて……。僕はなんてついていているんだ）

しみじみと感動する。今まで、寂しい人生だったが、ようやく春がやってきたのだ。

「じゃあ、お願いしようかな」

両手で股間を隠して、風呂からあがる。プラスチックの低い椅子に腰掛ける。

「お義兄さん、背中が大きいんですね。さすが、男性ですね」  
 スポンジにボディソープをつけながら、黒髪義妹が呟く。

「そうかな？ 僕なんか、背が低いからよく分からないけど」

「本当に、お義兄さんって素敵です」

スポンジが肩に当てられた。

(僕のことを素敵だなんて……。なんていい子なんだ)

両手を胸の前に合わせ、幸福を神様に感謝する十八歳だった。

スポンジがゆつくりと肩から肩甲骨に滑る。ソープのミルクリーな香りが浴室じゅうに広がっていく。

「あ、あのさ、有希ちゃん。もうこの家には慣れた？」

「はい。お義父さんも優しくしてくれますから。いろいろ、学校のこととか、訊いてくれます」

「そう。真奈はどうかなあ？」

「お姉ちゃんはああいうキャラで……。まあ、気に入っているとは思いますが。お姉ちゃん、お義兄さんに迷惑をかけていないですか？」

(ちよっと！ まずいよ！)

洋太の頬がかあつと熱くなる。有希が胸房を背中に押しつけて、耳元に尋ねてきたのだから。

(おっぱいがつ。ああ、なんて柔らかいんだ。これが、女の子のおっぱい。ああ、おっぱい！)

水着越しとはいえ、十六歳の乳房の柔らかさと弾力がしつかりと伝わってくる。そして、彼女の柔らかい吐息が耳をくすぐる。くすぐりたい。笑ってしまいそうだ。思わず、身を



軽くよじった。香水の匂いもあり、優しく、かつ悩ましいピーチフレグランスが揺らぐ。

「お義兄さん？」

「あ、ああ、うん、大丈夫。あいつはあいつなりに溶け込もうとしているから」

「そうですか。よかった。お姉ちゃん、はつきりものを言いつぎるところがあつて……。お義兄さんを傷つけていないか、気になっていたんですが……」

「大丈夫だよ。もう慣れてきたから。クラスにもああいう子はいるから」

胸が背中から離れた。洋太はほっとした。背中から腰にスポンジが降りていく。

「本当は、お姉ちゃんもお義兄さんの義妹になれて、嬉しいんですよ」

「そうかなあ？ そうは見えないけど。からかって喜んでいただけだよ」

「わたしは嬉しいです。こんなに優しいひとがお義兄さんだなんて……」

どきん、と心臓が跳びはねた。ああ、なんて嬉しいことを言ってくれるんだろう。真奈もこんな子だったらよかったのに、と残念に思う。

「こつちを向いて下さい」

言われた通り、義妹のほうに身体を向けて、目を皿のように大きく開いた。黒髪をアツプにまとめ、白いもつちりした耳たぶを露わにしている。前髪が数本、額に優しくかかっている。二重瞼に飾られた目、その黒く大きな瞳が熱っぽく潤んで見える。鼻筋脇には汗の粒がいくつも浮いていた。優美なラインを描く頬には濃桃色が滲んでいる。色は違うが、

みかんの果肉にそっくりな唇はぷるぷるしている。なんとという美少女だろうか……。

（こんなにかわいい女の子が僕の義妹だなんて。今まで生きてきてよかった……）

自分を小馬鹿にしているクラスの男子たちも、僕を羨ましがるに違いない。そう思うと、鼻が高くなる。

肩は華奢であり、少女らしい丸みを帯びている。鎖骨がくつきり浮きがつているのが色っぽい。スクール水着だから、肌露出は控え目である。胸の谷間すら露わになっていない。改めて、対面してみると、恥ずかしくなってくる。女の子とデートすらしたこともないのに、お風呂場で身体を洗ってもらっているのだ。

「お義兄さん、胸板がすごいですね。かっこいい……」

と、細い指を胸板に伸ばしてくる。ぴくん、と震えてしまった。くすぐりたい。桜色のような透明に近くもあり、ほのかにピンクを含んだ爪が、胸板を這う。指先は冷たい。そして、指はクッションのようでもある。溶けていきそうな柔らかさと、肉感を含み、なんともいえぬ感触だった。男の指とこうも違うものなのか、と感激してしまう。

優しい唇が綻んだ。愛らしい八重歯が覗く。

「男の子の裸を見るのは、初めてですから、どきどきしてしまいます」

「そう？ はは、僕もなんだか、照れちゃうな」

スポンジが胸板を這う。腕も丁寧に洗ってくれた。

「お義兄さんはカノジョはいないんですか？」

「いないよっ。いるわけないよ」

「不思議ですね。お義兄さんなら、モテるんじゃないですか？」

目を笑みに細め、目じりをとろん、と下げる。春の日差しのようなほほ笑みに、少年の胸はとろけていく。なんだか、くすぐったくもあつた。

「まさか。今まで、そういうことはなかったからね。告白されたりとか、手紙をもらったりとかは……」

自分で話していて、情けなくなってくる。中高と、ずっと女子とまともに会話したことがないのである。小学校時代は活発で、仲のいい女子もいたのだが、中学に入ってから、すっかり内向的になってしまった。友達と遊ぶでもなく、学校が終わったら、すぐ自宅に戻って望遠鏡の手入れをしたり、天文図鑑を見る毎日だった。

「もったいないですね。でも、よかったです。カノジョがいないと分かって」  
「それ、どういう……」

と、少女の手が止まる。視線が下半身の一点に注がれる。

洋太も真っ赤になった。股間のそれは、隆々と勃起していたのだから。鮮やかな桃色の亀頭に、包皮が少しだけ絡んでいる。小水穴にはなぜか、我慢汁が滲んでいる。生臭い臭いがした。竿は濃肌色で、血管が這いまわっている。自分でも、なかなかグロテスクだと

思う。きつと、有希には衝撃が強いのではないか。

「お義兄さん……。これ、なんなんですか？」

「あ、その……。ごめんっ」

「大きくなっちゃって。どうしてこんなふうになっているんですか？」  
有希が水着姿で現れるから——。そう言いたかったが、彼女を責めるようで、気が引けた。  
義妹が手を伸ばし、肉幹を手で包んでくる。

「ああ、有希ちゃんっ。だめだよっ。汚いからっ……」

「すごい。どくん、どくんって脈打っています。熱い……」

目元が濃朱に染まる。唇からミントの残り香を含んだ息が漏れた。

（女の子の手が、汚いおちん○んを握っている！ これ、現実なのかな？）

濃肌色の牡幹は醜いとしか言いようがない。義妹の水着姿を目にして、浅ましく我慢汁を滲ませている、そんな自分が情けない。それにしても、なんと柔らかい指だろう。どこかひんやりしていて、綿のように柔らかい五本指。そのひんやりした感覚が、幹の中まで染みいつてくるようである。

「気持ちいいんですか？ ぴくぴくしていますけど」

顔をあげ、義兄を見つめる。

「う、うん。有希ちゃんに触られて、気持ちがいい」



「やっぱり、男のひとはここがいちばん感じるんですね。ああ、先っぽがもつとぬるぬるしてきました。ん、なんか臭う」

眉の毛先を垂れ下げ、どこか切なげな顔になって呟く。はあ、と息が亀頭にかかって、ゾクゾクした。

「ん、動いちゃいますね、どうしても。ここも洗わないとだめですね」

「いや、自分で洗うからいいよ、有希ちゃん。——あ、ああつ」

ソープを手に塗り、泡まみれの指を絡ませてきた。軽いしごきだが、かあつと尿道が熱くなる。くすぐったくもあり、腰をもじもじさせてしまう。

「動かないで。洗えないじゃないですか」

「そうは言っても……。あふつ」

泡に濡れひかる中指がカリ首をさする。人差し指は亀頭頂き周辺を撫でまわしていた。我慢汁と泡がミックスされ、ねとー、と糸を引いて泡を落とす。小水穴はくすぐったく、かすかに痛みもあつた。親指と薬指、小指は竿を上下に動いている。

石鹸で洗いながら、間近で義兄を見つめる。潤む瞳に、甘い感情が湧きあがってくる。切なくもあり、苦しくもある。

有希は、すべすべした額に汗の玉をいくつも浮かせている。そのひとつが、つー、と眉間から鼻筋脇に流れていった。鼻翼膨らみの脇にも細かい汗の粒がびっしり敷きつめらて

いる。

「ふふ。お義兄さん、顔が真っ赤です」

「うう……。有希ちゃん、まじいよ、こんなこと」

「ただ洗ってあげているだけです。何もいけなくはありません」

耳元にふう、と息を吹きかけてくる。「ああつ」と甲高い声を漏らしてしまう。

「なんか、エッチな顔している」

くす、と笑って、有希は手コキを加速させていく。

ちゅく、ちゅくん、ちゅじゅ、ちゅくん。

我慢汁の分泌もあり、練り音がした。ジンジンする。ふぐりが膨れあがる気がした。

「ああつ……。有希ちゃん。だめだあ」

「先っぽからどんどん溢れてくる。すごい」

さらに、黒髪の義妹は口を開け、唾液を落としたり。唾液の玉が鈴口に落ちた。人差し指で唾液と我慢汁をミックスさせる。さらに唾を何滴か垂らし、竿肌にも塗りこむ。そして、五本指を上下させる。

ちゅく、じゅく、ちゅくんつ。ちゅじゅ、じゅん、ちゅくん。

せわしなく上下スライドする指、濃肌色の幹肌、その接触面に唾液が小さな泡をいくつも作って、クリーム色の照明を受けて輝いた。手が下ろされていくと、包皮がずりおり、

カリ首が丸見えに。手指が上に戻ると、包皮が戻り、一瞬、亀頭塊をわずかに覆う。その繰り返しに、尿道がどんどん熱を持つてくる。ますます小便穴に我慢汁が滲みだす。

白い指に我慢汁が触れ、弾けていった。

「有希ちゃんっ。もうだめだ。出ちゃう」

「いいの。出して、いっぱい。お義兄さんの白いの、わたし、見てみたい。ね、早く。出して、お義兄さんっ」

耳元に唇を寄せ、熱く息を吹きかけてくる。

「ああっ。で、出るっ」

キーンと熱いものが尿道を駆けあがる。背筋にまで熱い衝撃が伝わった。

どびゅっ。どびゅびゅびゅる。びゅるるるるるるっ。びゅん！

肉幹が引きつり、勢いよく、白精が噴火した。第一弾は放物線を描き、有希の手の甲へ着地。第二、第三、第四弾は白く細長い指を濡らす。さらに溢れて、亀頭丸みを白く汚していった。鼻をつく青い精臭に、頬が火照った。

有希は手を離れた。そして、義兄を見つめる。

「これがお義兄さんの精液なんですね。青い臭いがぶんぶんします」

「有希ちゃん、臭いなんか嗅がないですよ。恥ずかしいじゃないかっ」

顔を手に近づけ、愛らしい、小さな鼻翼を膨らませる有希。

「臭いだろう？ いい匂いなんかじゃないだろう？」

「男の子の匂いです。へえ、こんな匂いなんですネ」

口を開け、唾に濡れた桃朱舌を伸ばす。そして、手の甲に落ちた白玉をすくいとった。

「ゆ、有希ちゃんっ。そんなことまでっ……」

さらに、指に付着した精玉まで綺麗に舐めとった。こくん、とのどを鳴らす。まさか、文学好きのおとなしい有希がここまでするとは……。

「おいしかったです、お義兄さん。また洗ってあげますからね？ お義兄さんの立派なおちん○ん」

手筒で牡幹を包み、軽くシコシコする。くすぐったさとむず痒さに、笑いがこみあげてしまう。カクカクとうなずきながら、少年は大きく息をついた。

## 4

翌日、一時間目の授業が終わったところだった。休み時間で、洋太は天体写真集を見ていた。ポケット版で、持ち歩きが簡単なもの。周りでは、男子たちがふざけあっている。女子も、いくつかのグループに分かれて、話しをしている。

ひとりで本を読んでいるなんて、自分でも暗いとは思いが、少しでも、星の勉強をして



いたい、そんな少年だった。クラスの男子も、別に洋太をいじめたり、からかったりはしない。興味もないのだろう。

「洋太！」

ビクンッ！ とした。慌てて顔をあげる。今の声は――。

教室の後ろのドアに顔を向ける。そこに、義妹の真奈が立っていた。同じ高校の一年生なのだ。白いブラウスに、一年生を表す赤いネクタイ。黒と白とチェック柄ミニスカートが実に様になっている。紺のニーハイソックスを穿いていた。

手に弁当箱をハンカチで包んだものを持っている。

男子たちが一斉に真奈を見た。そして、洋太に視線を戻す。

みんなが見る中、いそいそと真奈のもとへ。

「なんだよ、こんなところまで」

「お弁当、忘れてるじゃない。なんだよ、はないでしょ」

義妹は細い眉を吊りあげた。

「ああ、ありがとう。わざわざ」

「ふん。三年生の教室まで遠いんだからね。有希が、お義兄さんがお弁当を忘れてるわ、可哀想なんて言っちゃってさ。放っておけばいいって言ったんだけど、持っていてあげて、って有希が強く言うもんだから」

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**